

No. 889

# 雄弁は力なり

4月の統一地方選挙、7月の参議院選挙を控えた今年は『選挙の年』とも言われる。石油ストーブを囲んで熱っぽい話し合いが続くある後援会事務所。選挙の方法も時代と共に変わって来た。前回の衆議院選挙ではテレビによる政見放送も始まった。候補者のイメージを巧みに売り込もうと広告代理店に依頼するところも出て来た。いわゆる選挙が『演出』されるようになって来た。

宮崎芳久(22才)は2年前、京都の大学を中退して上京してきた。そしてある候補者の秘書をすることになった彼は『選挙は演出ではない。あくまでその人自身が持つ人柄、言葉で勝負すべきである』と言う信念から雄弁術を身につけようと、日本青年雄弁連盟の事務局長、森陽一郎氏を訪ねた。森氏は『選び抜かれた言葉で心から話す効果を發揮するだけである。雄弁は決して選挙の為にあるのではない』という。

宮崎君は選挙という実戦の場を通じて森氏の言う『言道』の真髓に近づきたいと日夜激しい訓練に励むことになった。彼がこの厳しい訓練に耐えた時、『雄弁は力なり』ということを実感として受けとることだろう。

# ある帰郷

—東京・宮城—

1月12日未明、東京・練馬のある建築資材会社の作業員宿舎が焼けた。

そこには十一人の出かせぎ労務者とその家族が寝ていた。その炎の中に氏家勝次さん三十才は、妻と三人の子供を失った。四つの遺骨と、残されたたった一人になった我が子を抱いて、勝次さんは故郷宮城県築館町へ帰った。

父はすぐではなく、兄が跡をついでいる実家は、末っ子の勝次さんをあたたかく迎えてくれた。母はもう東京に行くなと言う。二人の兄も、親戚の人も家にいろと言った。

勝次さんも子供のために故郷にいたいと思う。でも、もう一度東京でやりなおしてみたいとも思う。

十五才で上京して十五年、幾つか職場をかえ、すこしでも稼ぎの良いところへと住居もさだまらなかった東京の暮らし。しかしやっと妻や子供に楽をさせてやれると思っていた矢先の火事だった。今も、炎の中の妻や子がまたから離れないという。

訪れる春、故郷を捨て、新しい生活の場を求めて、人々は東京に群れ来る。

(昭和四十六年一月二十九日封切)  
(昭和46年1月29日封切)